

ギャラリー・`温故知新、(下)

～開場 55 周年に～

昭和の文化人代表も `一等兵、



昭和 58 年にこの世を去った小林秀雄は、ひとことで言えば、保守的文化人の代表者であった。那須良輔さんは小林の晩年 10 年余、毎週のようにゴルフを楽しんだという。「弟のようにかわいがって頂いた」「文学の神様。文壇では泣く子も黙るこわい人」と言われた小林との交友を振り返った。

昭和の文壇でゴルフの腕前が確かだったのは丹羽文雄。那須さんに言わせれば、丹羽将官クラスとすれば、小林も自分も一等兵だという。那須さんは小林の 11 歳年下だが、小林は実に素直な好々爺で、ゴルフのうまい

人の話には熱心に耳をかたむけた。帰りには必ず鎌倉の小料理屋で一杯飲むのを楽しみにしていた。「私に対しては、万年一等兵同志の戦友みたいな親しさを感じて下さったのだろう」という。

小林が死んだ時に、那須さんはゴルフ道具をもらっている。那須さんがたった一度というホールインワンが、小林さんと通っていた保ヶ谷カントリーの 12 番だったという。



風格と気品



那須良輔さんは、塩原カントリーの良さを、こんなふうに書いている。

塩原ゴルフ場の風景は、晩秋から冬にかけて、雑木林が渋い茶色に染まるにつれ、赤松の冴えた緑色が際立って美しくなる。ここ数年来、各コースのあちこちに、いつの間にか大木に育った赤松が目立ち、風格と気品をそなえてきたことはうれしいことである。

いま簡単に雑木林と言ったが、実は主役の赤松をのぞいて、この雑木林に深々たる興味があるのだ。まず一番多いのがミズナラ、ナラ、ヤマツツジだが、他にぎっと名を挙げると、トネリコ、ホオ、シャラ、ガマズミ、エゴ、マンサク、ナツハゼ、クリ、ハゼ、ウルシ、ヌルデ、ヤマザクラなどの顔が見える。

私はスポーツマンとしてのゴルフを楽しむ中で、こうしたコースの中の樹木、野草、野鳥、動物などに関心をもつので、幅広い楽しみ方となっている。

松とミズナラ、ナラ、クヌギなどが多いところには、秋にはアマタケ、ハツタケ、サンゴタケ、センボンシメジ、カキシメジ、アカンボその他色々なシメジ類が顔を出す。

自分が打ったボールがハツタケのそばに止まった時など、私は嬉々としてボールの飛距離を忘れて、ハツタケを大事にとって、それからボールを打つ。ゴルファーの皆さんも、ミスショットした時など、天をあおいで溜息をつく前に、秋空に広がる翳雲をながめるとか、林の間を飛び回るカケスの声を聞くとか、このコースならではの自然を味わうゆとりを持つことはいいことだと思う。

那須さんがこれを書いたのは、30年ほど前のこと。赤松にはマツクイムシの被害も目立ち、周辺の林の状況もかなり変化しているが、那須さんが書き残した「風情」は、そこここに残っている。



ドンマイ、ドンマイ



誰でもある経験だが、スタートホールの第1打球は程度の差はあるが、妙に緊張する。特に初めて同伴するのが、妙齢の女性となるとなおさらだ。那須さんも人後に落ちなかったようだ。

クラブのヘッドの向きから、ボールは飛ぶべき方向の逆方向にころがったようだ。これがいわゆる「見事なチヨロ」だ。さすがの那須さんも、ほほが赤くなっている。同伴の女性はなんと声をかけてくれただろうか。

今流行りのAIに聞いてみた。

「大丈夫ですか。次はうまくいきますよ」

「大丈夫ですよ、誰だってミスはあります。次につなげましょう」

かけられて一番気が楽なのは、「ドンマイ、ドンマイ」。

いい友人を得る



那須さんは文壇ゴルフで、横山隆一さん、五木寛之さん、それに「講談社社長のお嬢さんと一緒に回った」と会報で報告している。このお嬢さんについて、「背も高くスマートな美人」「多分まだ大学生だと思う」と紹介している。

講談社社長・野間省一さんには、一人っ子の娘しかいなかったから、後に社長になった佐和子さんだったはずだ。佐和子さんは昭和62年には、亡くなった夫の跡を継いで社長に就任している。

確かに佐和子さんは若作りだったが、「多分まだ大学生だと思う」というのは、那須さんの読み違いだったろう。「若い人たちとコースを回れるのは



仕合せ」と喜んでいるから、「ナイス、ショット」の声もいたくはずんでいたことだろう。

五木さんについて、「静かな紳士で、私のチョロ玉でも、『ナイス・ショット』と声をかけてくださる」と感心している。ちなみに、このコンペでの成績は、「私はブービーであった」とある。那須さんは言う。「ゴルフは色々な人達と遊べるところが面白い。それぞれの人柄、年齢、職能を理解し合いながら、いい友人を得るのは楽しい」とも。それも、ゴルフの楽しさではある。

台風には勝てず



心を躍らせていた美女とのゴルフ対決が、昭和62(1987)年10月の台風19号による大雨で流れ、いたく残念がった。

その美女とは、当時、NHK「ニュースセンター9時」で人気キャスターだった宮崎緑さん。その前の年に塩原カントリーでプレーし、宮崎さんがコースを気に入ったので、この年もセットしたという。

予定していたプレー日の前日から雨脚が強まり、鎌倉に残っていた奥さんと、宮崎家の夕食会に変更になった。那須さんは一人カヤの外となり、山荘で歯がみを強いられたようだ。

ことし、夏の暑さは？



那須良輔さんの山荘は、クラブから車で20分、那珂川沿いにあった。その見晴し台から、那珂川へ向かって練習ボールを打ったが、めったに川まで届かず、河川敷の櫛林に落ち、「カケスのあざ笑う声だけが聞こえた」という。

塩原には赤とんぼが多い。

肩に来て 人なつかしや 赤蜻蛉
夏目漱石の句を引いて、「若いうちはスコアの成績に夢中になるが、ゴルフが下手で、おまけに齢をとると、コース

を歩きながら野鳥の声や草々を楽しむようになる。季節の野鳥や野草をウォッチングしながらプレーするのもいい。

能登地震で明けた辰年。この夏の暑さや、カミナリ様はどんなものだろう・・・



自然度が下がると



塩カンでも近年、カラスが多くなったが、那須さんは「塩原カントリーではカケスは多いがカラスは少ない」と書いている。那須さんが、ハンディ15の英文学者から聞いたカラス談義。

長崎・雲仙のゴルフ場。ティーグラウンドから見ると、バンカー一周りにカラスが三羽。ボールはカラスに向かって飛んで行き、カラスにさらわれた。次のホールで、OB 杭の手前にカラスの群れがいたので、今度はそれに向かって打った。待ちましたとばかり、カラスがそれをさらった。そして、次のホールでもやられ、三個のニューボールを失敬された。

那須さん自身もカラスに二度やられたという。伊豆の日活国際と横浜の保土ヶ谷。日活ではキャディさんが、陸上競技のスタートに使うピストルで追い払っていたが、弾が出ないのを見破られてしまっていた。「カラスがボールをグリーンに落としたり、ルール上はOK」と聞いたから、「カラスを飼いならして使ったら面白かろう」とも。

昨今の塩カンでもフェアウエーで、数十羽が何かをついばんでいる時があるが、「ミミズを食べている」そう。ミミズがいるから、ボールやプレーヤーの持ち物を狙わないが、農薬をジャブ、ジャブ撒いて、ミミズがいなくなってしまうと、ボールやカートのパーチを狙うようになるという説もある。

塩原カントリークラブ！ 攻略編！！【南コース】 — 中里 鉄也プロ — ☆ 南コース 5 番 ☆



【コース解説】

唯一ワングリーンの右ドックレックのミドルホール。1打目はフェアウェイやや左に構えて打っていきたい。右にバンカーと松の木、フェアウェイ奥にも松の木がある為距離と方向性が求められる。しかしグリーン手前から花道が広く使えるので思いきって右バンカー越えも狙いたい。

2打目はボールの位置にもよるが松の木が左右にあり大きめのクラブで低い弾道のショットで転がしてのせるのも有り。グリーンは左奥から傾斜があり左右からは難しく手前から攻めたい！

今回は、南コース 6 番を紹介します!!

工房專業

大谷パーキングエリアのリニューアル工事が終わり、引き渡しが済んだ後、江場友幸は社長の兄に、「これ(黒字分)は、オレがいただいておくよ」と告げて、一週間ほど休んだ。その後も、いぶかって連絡してくる上司に「あと一週間したら出る」などと言いながら、結局、退職する格好になった。あの黒字分が退職金代わりだったことは、兄も薄々感じ取っていたようだ。

クラブ工房が專業になると、必要な電動工具も大型化せざるを得なかったが、住宅街の中にあつた工房は、100 ボルトの電流しか引けず、旋盤やスライス盤それに、角材を円く削り出すコッピングマシーンを導入しようとしてもかなわないことがわかった。幸いにも、近くで機械製作所を經營していた人と知り合いになり、そこを使わせてもらった。江場の機械操作が、よほどおぼつかなく見えたに違いない。時には江場に代わって、その知人が作業を完璧にこなしてくれた。そして、仕切りを立てて、江場専用の作業スペースに使わせてくれた。

残念なことにこの知人は、その後、がんを患って亡くなり、残された奥さんが工場をたたむことになった。内部の機械類の処分を頼んだ業者の見積りに立ち会い、江場の機械は残しておいてくれるよう約束した。なのに、いざ処分作業が終わってみたら、江場の分までそっくりなくなっていた。

約束した業者と現場で撤去作業をした業者が別で、引き継ぎがうまく行っていなかった。江場はあわてて追跡したが行き先を突き止めることはかなわなかった。工房の周りには新しい住宅が建ってしまい、200 ボルトの電流を引くとなると、必要な資金も身の丈を超えた。やむなく、大型機械を使う作業は外注にせざるを得なかった。

それでもその頃になると、江場の仕事の確かさは、プロからアマにまで広がり、ベテランアマの客も多くなった。ただ、新しいセットを作ってもらうには、「面接があつて、合格しないと作ってもらえない」というフェイクも流布された。

「洋服を作る時、『洋服作って』の一言だけじゃ注文は受けないでしょう。それと同じで、どんなクラブが欲しいのか、どんな素材で、どんな機能を持たせ、どんな使い勝手のクラブ欲しいのか」を聞かせてもらわなければ作れない。色合いをどうするかまで聞かないと……。「時には目の前で、クラブを振ってもらうことだってあります」と言う。「クラブを作って」のひと言だけでは、作りようがない。だから詳しく聞くのは、江場のクラブ作りの基本なのである。電話で「あなたの好きなように」と頼んできた客は即座に断った。

アメ横デビュー

江場が工房專業になってからは、小針春芳は週に一度は工房を訪れた。「これ、ちょっと見てくれないか」。とくに、試合に出掛ける前日には、クラブを二、三本抱えた小針が必ず姿を見せた。次の試合があるゴルフ場の傾斜や芝の具合、ホールの配置を調べ、「どこにボールを運び、どこへ、どう打つか」を頭にたたき込み入念に準備をした。クラブの調整もその一つだった。

アマチュアのお客さんが、ゴルフ専門誌「Choice(チョイス)」を持参し、東京・アメ横に開店したゴルフショップが、そこに連続して広告を出していることを教えてくれた。元々、カバン店を營業していた経営者が、スペースが広すぎて不効率なため、半分を使って、地方資産家の息子ら二人と資



金を出し合って開いたショップだった。その二人のうちの店長を務めた方が、クラシックゴルフクラブに興味があった。

クラシッククラブの愛好家の間では、コレクターとして知らない人のいない医師が都内にいた。若い店主は医師が主にアメリカで収集したクラブを、非売品として店に陳列させてもらい評判になっていた。そして、店長が客から頼まれた修理を、江場に頼みたいと、伝えてきた。江場は店長とじかに会って話してみても、信頼に足る情熱を秘めた若者とわかり、客から修理を頼まれたクラブをまとめて送らせ、直して送り返してやるようになった。

江場はその医師の自宅兼医院に招かれる仲になった。六、七階建てのビルの下層階が医院で、上方は自宅とコレクションの収納部屋だった。ワンフロアに外国の有名プレーヤーが使ったクラブセットをバックごと手に入れ保管していた。とりわけ、パーシモンのドライバーの逸品を世に出していたマグレガー社のクラブがお気に入りだった。ニクラウス、パーマーからノーマンなど、有名プレーヤーの使用クラブでないものないといわれるほど揃っていて、その時価総額は当時で三億円は下らないといわれた。

そのほんの一部をアメ横のショップに非売品として陳列したが、手元に置くには手狭になったせいもあった。医師は毎年、アメリカ・オーガスタにマスターズを見に行き、大会終了の翌日にプレーし、有名ブランドのゴルフセットを買い付け、それは売り物として、アメ横のショップに並べていた。

店長は江場にも、エバモデルのクラブを展示する非売品の陳列コーナーを提供してくれた。その展示品を見本に、クラブセットを発注してくれる客も出るようになった。エバモデルは、マスターズ、全英オープン各3勝とメジャー6勝のニック・ファルドにも使われたと聞いたことがあった。

その頃、アメリカ産の柿材・パーシモンの代わりに、国内でも採れる和柿を使ったセットも出回った。しかし、どうしても強度に乏しく、安かろう悪かろうだった。江場はあくまでパーシモンにこだわり、日本で唯一だった埼玉の販売業者に話しをつけ、パーシモンを買い付けた。医師の求めに応じ、それを使ってドライバーを三本ほど作ったことがあったが、そのうちの一本がファルドの手に渡ったようだった。

プロテストの朝

青木功、尾崎将司、中島常幸の前の世代に「和製ビック3」と呼ばれた三人がいた。河野高明、安田春雄、それに江場が東京・芝のゴルフ練習場で言葉を交わした「ビック・スギ」こと杉本英世である。杉本は一九三八(昭和一三)年に静岡県で生まれた。高校時代から並外れた体格で、スポーツは万能、柔道をやれば八か月で黒帯を取り、プロ野球・近鉄の別当薫監督から「プロ野球に来ないか」と誘われたことがあった。日本オープンの試合を見たのがきっかけで、高校二年の夏から、川奈ホテルゴルフコースの石井茂プロから指導を受けてプロを目指した。

プロゴルファーになるプロテストは、戦後だけでも何度かの変遷がある。杉本がプロを目指した頃は、キャディー・トーナメントと呼ばれたキャディー、研修生の競技会があり、その上位八人に出場が許されたプロの月例競技会で優秀な成績をあげ、協会から認めてもらうしかなかった。

杉本は一九五八(昭和五八)年のキャディートーナメントを経て、月例会に出たが、プロ認定に至る成績を残せなかった。翌年も我孫子ゴルフ倶楽部(千葉・我孫子)で開かれた月例会の参加資格を得て、プロ入りを賭けた。その月例会の世話役だった小針春芳は、前夜からクラブのロッジに泊まり込んでいた。目を覚ましてコースの方を見回すと、パットの練習グリーンで、体のひときわ大きい若者が必死でパッティングを繰り返



している。

周りはまだ薄暗く、小針が顔を洗って、早い朝食を取り終えても、その大きい若手がグリーンを離れる気配はない。小針は年齢や体つきから、プロを目指している研修生だと推測した。若手プロでも相当な人数の若手の顔は記憶していたが、近づいて見ても覚えはなかった。

黙ってパターの動きに視線を飛ばすと、大柄の若手の方は、それが小針であることに気付いた。小針が日本オープンを制した次の年のことだから、当たり前だった。

「そんなことをやっているのは、百年たっても通らないぞ」

「パットの名手」と言われ始めたチャンピオンからの手厳しい言葉に心が洗われたのか、肩に入っていた力がスーッと抜けて行くような気がした。小針はしばらく、手振り身振りを交えて、杉本に話し続けた後ロッジへ引き上げた。杉本はこの試合の成績で、プロに認定された。

江場が小針と話していて、なにかの拍子で杉本の名前が出た時、小針から杉本にまつわるそんな思い出を聞かされた。杉本プロと昔話をしていた時にそれを話すと、「そうなんだよ、那須の先生にアドバイスを受けたおかげで、プロに合格できた」と聞かされた。

杉本は、日本オープン、日本プロ選手権などで年間6勝を挙げ、華々しい戦績を残すと同時に、ゴルフ場の設計や監修にも実績を残した。北海道から九州まで二十五コースにのぼり、テレビのレッスン番組、解説などでも、幅広い人気を呼んだ。アメリカツアーに参戦して、多くのコースを見聞し、試合で回ったことが、深いゴルフ理論と設計思想に結びついた。

栃木県大田原市にある千成ゴルフ倶楽部は、「ビック・スギ」の自信作という評価が高い。緩やかな丘陵の高低差を生かしたフェアウェイと那須連山の眺望を楽しめるチャンピオンコースで、一九七六(昭和五一)年にオープンした。杉本はその副社長にと声がかかったが、それを断って専属プロになり、よくここでラウンドやレッスンをやり、男子のプロテストやチャレンジツアーの舞台にもなった。

(つづく)

編集後記

静かな年明けを願っていたら、とんでもなかった。あろうことか、元旦の夕方、能登半島を震度7の地震が襲い、多くの死傷者を出し、民家の多くは倒壊、朝市で有名な輪島の商店街を焼き尽くした。海岸沿いを縫っていた道路網は寸断され、救援体制の立ち上がりを遅らせてしまった。海岸線では最大で4mもの隆起が起こり、いくつもの漁港が接岸不能となった。地場産業の漆の工房も壊滅的な被害を受けて、地域の生業をどう再生するか、長い苦しい道のりが待っている。複数の活断層のズレがもたらした、数千年に一度の天災だという。観測網は整備されても、予知能力はほとんどゼロに近いというのが地震予知といわれる。もって瞑すべしと思った。

井上 安正